

# 輸出急増 コメの国復活

## 高橋昭雄東大教授の農村見聞録②

### 飛び立つ ミャンマー

今回は、日本の「農家」とミャンマーの「農民世帯」の違いに焦点を当て、その世帯数は農村に居住する総世帯数の半数を占めるに過ぎないことについて述べた。今回は、この農民世帯すなわちミャンマー的農家が耕作する農地とそこで栽培される作物について考えてみることにしよう。

### 6種類の農地

ミャンマーでは、農地の地目は、水田（レー）、畑（ヤー）、樹園地（ウーイン）、カイン、ニッパヤシ園（ダニ）、焼畑（タウンヤー）の6種類に分類される。前者の3地目は日本にもあるが、後者の3地目は日本にはない。カインとは雨期に水の底に沈むが、乾期に姿を現して耕作可能となる肥沃な土地のことである。ただし8割方は水田と畑であり、レーヤーといえは農地全般を表す用語となる。

軍事政権が登場したころ（1988年）、全農地面積（作付純面積）は約820万<sup>ヘクタール</sup>で、構成比は水田60%、畑25%、樹園地6%であったが、2010年には農地面積が1350万<sup>ヘクタール</sup>に増加し、水



田が5割を切る一方、畑が30%、樹園地が14%となった。

ミャンマーは、「コメの国」だ。ビルマ式社会主義が始まる60年代初頭には、作付面積の6割が水田で作られる水稻で占められ、世界一のコメ輸出国だった。それが社会主義崩壊時の88年には5割を切り、軍政期にも漸減して、10年には3割近くになり、輸出もほぼ皆無となってしまった。水田面積の比率減少と歩調を合わせて、ミャンマー農業に占める稲作の比重も着実に低下してきている。

また、王朝時代の輸出品であった綿花、植民地期に導入されたサトウキビ、日本軍が持ち込んだジュート（麻）は、コメ産業と同様に国営化されたため

に、衰退の一途をたどった。

これらに対し、重要度を増しているのが、畑や水稻の裏作として水田で作られるマッペ（ケツルアズキ）、リョクトウ、キマメ、ヒヨコマメなどの豆類である。

また、中国からの旺盛な需要に対応し、荒れ地を開発して植えつけられるゴムも急速に栽培面積が増加している。豆類の作付け増加は畑の増加に、ゴムの植栽増加は樹園地の急増に、それぞれ対応している。

### 最重要視される主食

とはいえ、最も広く栽培されているのはコメであり、構成比は減少しても作付面積も生産量も増加している。またコメはミ

④稲刈りをする農業労働者。コンバインを借りるのが間に合わず、手刈りをしているという＝3月、ミャンマー南部エーヤーワディ管区パテイン県カンジータウン郡

⑤村に新登場したコンバイン・ハーベスター。後ろは村役場＝3月、ヤンゴン管区フレグー郡（いずれも高橋氏撮影）



ャンマーの主食であり、1人当たり年間消費量は180～200<sup>キログラム</sup>と見積もられており、日本の3倍以上である。歴代の政権は、農業分野ではコメの生産を最重要視してきたし、それは現在でも変わらない。さらに民主化後、コメの輸出が急増しており、コメの国ミャンマーの復活がささやかれ始めている。

コメの増産に寄与したのが、70年代後半から日本の経済援助とともに導入された高収量品種米である。現在では高級米を除いて、国内消費も輸出もこの品種群が大半を占めるようになった。さらに21世紀に入りF1ハイブリッド米が普及し始めた。

これら新品種の栽培に欠かせないのが、灌漑である。ミャン

マーの灌漑率は88年の12%から10年には25%と倍増した。これによって2期作が増加し、単位面積当たり収量の増加につながった。ただし、新品種米は栄養分を与えなければ高収量性を発揮できず、また病虫害に弱いので、化学肥料や農薬が必要である。さらに、2期作には手早い適期作業が要求されるので、牛で耕起や脱穀をしていたのでは間に合わなくなり、耕運機や脱穀機が急速に普及している。

ミャンマーの米作は21世紀に入って、化学化や機械化が進み、それに伴って金のかかる農業に変貌してきた。こうした技術変化は当然、農村社会の変化を引き起こす。これについては次回に詳述することとしよう。

＝随時掲載